

六つの手紙

著者： MORIO・KEI

MORIO 出版

MORIO・KEI



千葉県生まれ。デビュー小説「六つの手紙」で、本格的な執筆生活をスタートする。

MORIO 出版

六つの手紙

MORIO・KEI

(MORIO 09423)

目次

第一章 一つ目の手紙
第二幕 時間の一致

・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・

一六
一一

第一章

一 つ目の手紙

大学が夏休みに入って二日目のことだった。僕は先ほど借りたばかりの十冊の本を背負い蒸せるような暑さの中、図書館から帰宅した。何の面白みも無いアパート暮らしの僕にとっては暇つぶしの図書館通いはむしろ贅沢にも思える。夏休みを利用して気になっていた本を手当たりしだいに借りていく生活が始まったわけだ。

言うまでも無いが学生の夏休みは長い。長いからこそ、普段できないこともできるし、逆に暇をもてあます機会も増えるわけだ。何年も前から変わらないうことだ。僕は毎年毎年、いやになるほど時間をつぶす羽目になっていたのだから、あまり夏休みといつものが好きではない。普段は嫌気の差す授業も、不思議と恋しくなるのだから、人間とはつくづく勝手な生き物だなと、毎年毎年、同じように感じていた。もちろん、僕もその仲間である。

しかし、そんな長い休暇にもいくつかは珍しい体験がある。夏休みの第二の法則だ。暇なのに面白くことがある。人によっては旅するものもあるだろうし、何気ないありふれた時間が、なぜか夏休みになると新鮮に思えてきたりする。夏休みは日本に根付いた文化である。

今年は何が起きるのだろうか。淡い期待を胸に秘めながらも、こちらから約二ヶ月の間、僕はいったい何をすればいいのだろうか。そう考えると果ての無い時間に早くもうんざりしてきた。昨日はそう思って、なんとなしに図書館合本を運んだ。そして本を読んだ。今日も昨日と同じことを感

じつとも、結局同じ時間に図書館へ行った。早くも二日たった。片方では、こんなにも早く時間が過ぎるものだな……うれしくなってくる。また一方では、これから毎日同じことばかりするのだと、自然と指を折り始める自分がそこにいる。

本だけが何もかも忘れさせてくれる最良の友達だ……僕は思った。

そんな、どうでもいいことをつぶやきながら部屋の鍵を取り出ししていると、郵便受けからひよりと顔を出している封筒に目がいった。やたらと太った茶封筒だ、絶対に手紙だけではないはずだ。

……これだ！

普段と明らかに違う生活、さらに夏休みといつどこで一層胸がときめく。むさくるしい安アパートにも、ちょっとくらくらいは楽しいけど、あってもいいはずだ。僕は自分にならずいた。

何の変哲も無い茶封筒が、下半分を覗かせていた。随分ずさんな入れ方だと、その時は感じた。だが、普段は滅多に手紙を受け取る機会が無い僕は、なんだか嬉しい気持ちになり、チラシなどと一緒はその手紙を持ち帰った。階段を上る音が少し大きく感じた。

僕は、二階建てのこのアパートの、一番奥の部屋で暮らしている。大学の寮は希望者が多いため、抽選となったのだが、運悪く外れてしまった。知り合いの不動産屋の叔父さんに相談して、このアパートを半額で貸してくれることになったのだ。このアパートは叔父さんが経営している。何にせよ、大学まで徒歩三分と言つのは嬉しい。どうして大学生の入居者がいないのか、不思議なくらいだ。また、小さいが近くに図書館もある。大学入学三カ月後によつやく手に入れた、充実した環境だった。まあ、部屋は狭かったが：文句は言えまい。

部屋に戻った僕は、早速先程の手紙に目を通した。丁寧に書かれた字、手紙と並行に張られた切手、一見すると立派な手紙だ。だが、よく目を凝らすと何か違和感を覚える。変な匂いがある。変な匂いがある。だが、一番妙なのは消印だった。

「大井村」とある。聞いたことも無い場所だ。第一、「村」など入ったためしもない消印の形も、見た事が無いものだ。封を切る前に封筒の裏面を調べたが、差出人の名は書かれていない。だんだ

ん不気味に感じてくる。果たして封を切つて良い物か、一瞬ためらったが、思い切つて横にナイフを入れた。

少し手が震えているのを感じた。それは、手紙の中から姿を覗かせた一枚の写真によって、更にひどくなった。山小屋のような建物の裏には、森のような物が移っている。写真中央には一人の男性の姿だ。鍬のような持っているところを見ると、山奥の隠居生活と言ったところだろうか。写真がモノクロなせいも、より一層不気味だ。色が無い……こつ、記憶を吸い取られるような雰囲気だ。

封筒にはその他に小さな紙の切れ端のようなものが入っていた。だが、何も書いてある様子は無い。何かのいたずらだろうか。そもそも、この写真は何なのか。茶封筒を使うのだから、広告目的ではないはずだ。僕はこの写真に写つてる人物も、景色も、まったく見覚えが無い。しかし、あて先は「久保」とある。僕の苗字と一緒だ。やはり、僕宛の手紙なのだろうか。僕の知らない親戚か誰かが身寄りの無い生活に堪えかねて僕に助けを求めた……にしては連絡先も無く、おかしい。では監禁された誰かが、やっこの思いで一通の手紙を誰かに託したとすればどうだろうか。……いや、そう考える意味がわからない。理屈も通らないし、第一「誰か」とは誰なのだ。ミラテリー小説好きなせいも、どうも考えが寄つてしまふ。

とりあえず、差出人の素性も、手紙の中の写真も解らないこの奇妙な手紙は、僕の引き出しの

奥深くにしまわれることになった。捨てはしなかった。一応、「僕宛」なのに変わりはないから…。

だが、この手紙が、僕を取り巻く環境を一変させたようとは…

第二章 時間の一致

例の手紙の件から三日後、僕は大学のサークル仲間と図書館で集まり、会議を行うことになった。ミステリーサークル、僕の参加しているサークルだ。ミステリー好きの仲間が集まって、ミステリー小説を呼んだり、オリジナルの小説を書いたり…時には演劇をすることもある。まだ設立から日が浅いともあり、メンバーはたったの三人しかいない。

十時ごろ、図書館に向かおうと玄関の扉を開けたときだった。アパートの管理人が目の前に立っていた。

「大家さん、こんな時間にどうしたんですか？僕に何か用事でも…？」

もごもごと話し掛けるのは大家さんの特徴…か。腰はいつも低い。何かに怯えているような雰囲気がある。歳は知らないが、白髪交じりのその風貌からして六十過ぎなのは間違いないだろう。

「久保君、君の叔父さん来てないかい？今日の九時に、うちのアパートに新しく入る人の礼金を、君の叔父さんに渡す予定だったんだが…約束の時間をとくに過ぎているのに全然連絡も無いし…。」

珍しいですね。叔父さんは時間に結構こだわる人だから、こつこつ時には時間前に現れるはずで

すけどね。」

「それは私も解っているよ。まあ、礼金を渡して、いつものように世間話に花を咲かせるつもりだから、これと言って急ぎの用でもないんだがね。」

叔父さんの方から連絡がはい……とは無いでしょうけど、とにかく連絡が入ったら大家さんにつなぎますから。じゃあ、僕はこれぞ。」

適当な単語を並べて、急ぐようにその場を離れた。あの人は苦手だ。少しボケているのだろうか、よく、あらぬ方向を向いて凝視している。考え事をしている目ではなさそうだが。こんなに話したのも久しぶりだ。

ふと時計を見ると十時十分を回っていた。約束の時間は十時だったが、その時間に家を出たのだから間に合うはずも無い。僕は叔父さんと違って時間に執着の無い、面倒くさがりな性格だ。それは自分でも良くわかつている。とにかく急ぎ足で図書館に向かった。途中、雨がぽつりと降り始めた。僕は、雨にぬれない様にますます息を切らして、走っていった。

図書館にいた時にはもう、全員集っていた。やはり……皆の視線を感じる。僕は軽く謝って会議

の事を持ちかけた。

「行き先は決まったのか？僕は長野辺りがいいと思うんだけど。」

「おいおい、いきなり始めるなよ。まあ、そこに座って、ほら、息が切れてるぞ。」

今日の会議は「ミステリースークルのメンバーで行く、豪華ミステリースーツアー」がお題だ。ミステリースークルのメンバーの間で友好を深めようと、ありったけの旅費を投じて、ミステリーを感じさせるあらゆる所へ旅行に行くことになったのだ。今日はその行き先を決める会議と言っわけだ。

僕は、長野がいいと思った。まず捨てられないのは、山のある景色。次に湖、そして森、最後に山寺だ。どれも、集ることで恐怖が沸き起るものばかりだ。これを二人でリュックを背負い、夕方辺りに散策する、こんなにミステリーな事はない。これらの条件をそろえると長野辺りが一番いいと思ったからだ。考えるだけでわくわくする。

「久保！話を聞いているのか！ちゃんと会議に参加しろよ！」

僕は気付くとひとり、妄想をしていたようだ…。

「悪い悪いで二人の希望は？」

「でじゃないだろ。とりあえず佐山と俺は京都がいいと思うんだが。」

「京都だと…寺と民家だけだろ。長野はどつだろ。楽しいと思うけど。」

「でも、長野だと山だろ。俺、血の巡りが良くないから、山登ると酸欠起こすんだ。岩藤も京都だし、多数決で京都にしような。あ、そうだ。ほら、これこれ。観光用の手紙も届いてるし。」

多数決で決めようとするとは、全く持って理不尽な意見だ。ん、そういえば…手紙、そうだとすっかり忘れていた。二日前に届いたあの変な手紙のことだ。この二人なら喜んで食いついてくるはずだ。

「ちよつと二人で決めててくれ。忘れ物とってくるから。」

「お、おい久保！京都でいいのか？」

「僕は急いでアパートに向かった。」

アパートに戻った頃、丁度、大家さんが入り口から出てきた。先程とは打って変わって、なんだか落ち着きの無い様子だ。何かミスアリーを感じる。時間を気にせず、僕は大家さんに話しかけた。

「どっしたんです？ そんな顔して。」

「あ、久保君か。ちょうど良かった。実は…空き巢に入られたんだよ。」

「えっ？ 空き巢ですか？」

「僕は、突拍子もない返答に声が上がった。」

「ああ。その郵便受けを見てくらん。」

「あれっ？ 何も入ってる様子が無いですね。といつことは空き巢ってこの事ですか？」

「そつなんだ。今朝、君と会っただろう。ほら、朝十時くらいに。」

「ええ。だって、つい二十分くらい前のことですからね。覚えてますよ。」

「私がその後、すぐに管理室に向かったんだ。その途中、空きつ放しのポストがあったから閉めようとして手を伸ばしたんだ。そうしたら、だよ。何かがおかしかったんだ。だから他のポストを眺めていたら……」

「どれも空っぽだったって訳ですか。ふつむ、これは事件ですね。」

「いつの間にか探偵を気取っている。さすがにミラテリーサークルの一員だ。」

「それで、念のため警察をよんで、入り口で来るのを待ってたら、君が来たって訳だ。」

納得は出来た。しかし、郵便物を狙うなんて随分手抜きな犯人だ。何の苦勞もなく、お目当ての物を、後で物色できるわけだ。まあ、このアパートではポストに鍵なんて洒落た事はしていなかったから盗まれても当然と言えば当然なのだが。

「あつーそつだ。こんな事してる場合じゃないんですよ。僕、行きますからね。」

僕は急いで階段を上がっていった。

部屋に着いて、すぐに手紙をしまい、ついでに二人の機嫌直しに、冷蔵庫に入れておいた缶コトをもつて、部屋を出た。

図書館に着くと、二人とも不機嫌そうな顔をしてベンチに踏ん反り返っていた。…なんて言い訳しようか…。

と、足音に気付いたのか、二人とも、だるそうに起き上がってこちらを向いた。

遅いぞ！何取りにいつてたんだ。もう行き先決まったぞ！」

「すまん。ほら、コトでも飲んで機嫌直してくれよ。それに、面白いもの持ってきたぞ！」

二人とも、首をかしげている。もう、僕の悪行の事は気にしていないようだ。

「面白い物って、何？ミステリー小説？」

「ほう、ね。」

僕は自慢げに例の手紙を差し出した。…だがやはり、二人とも、首を傾げているままだ。僕は手紙のことを話し出した。

「…そう言うことが、珍しいともあるんだな。佐山、この大井村って知ってるか？」

「いや、知らん。」

「だろうな。久保はこの大井村について、何か調べたのか？」

「それが、まだなんだ。郵便受けから半分はみ出た時から変な感じがしたんだ。だからちょっと不気味になって…机に入れといた。」

「でも、調べない訳にはいかないだろう。ここは図書館だろう。」

「じゃあ、今日の会議はおしまいたな。京都で決まり！」

「今日は大井村のことについて、徹底的に調査だ！」

そうして「大井村調査」が始まった。まず二手に分かれて民俗資料、風土資料、地図の三項目から、それぞれが調べる事になった。僕は風土資料についてだ。

この図書館は小さいせいか、マイナーな本ほど集りやすい傾向がある。利用者も皆、眼鏡をかけた学生や、新聞目当ての老人など、いかにもな顔ぶれだ。だが、民俗資料は残念ながら関東近辺の物しかない。手紙の消印は有効なものだから、関東に無いものは探しようが無い。僕は祈るよつに資料をあさった。

だが、どの資料も大井……山しかない。大井村なんて村はどこを探しても無い。やはり、関東には無いのだろうか。それに、「大井村」なんて、いかにも東北の方面の名前だ。半ば諦めて持ってきた缶コーヒーを飲みながら、べらべらと……いや、古い資料だからそう言う音はしなかったが。

結局、一通りの資料を見終わってしまったが、何も収穫は無かった。

2004年4月24日 初版発行
2004年7月3日 第二版発行
2006年2月5日 第三版発行

著者 MORIO・KEI
発行人 MORIO・KEI
発行所 MORI 出版

<http://book.morik.net/>
